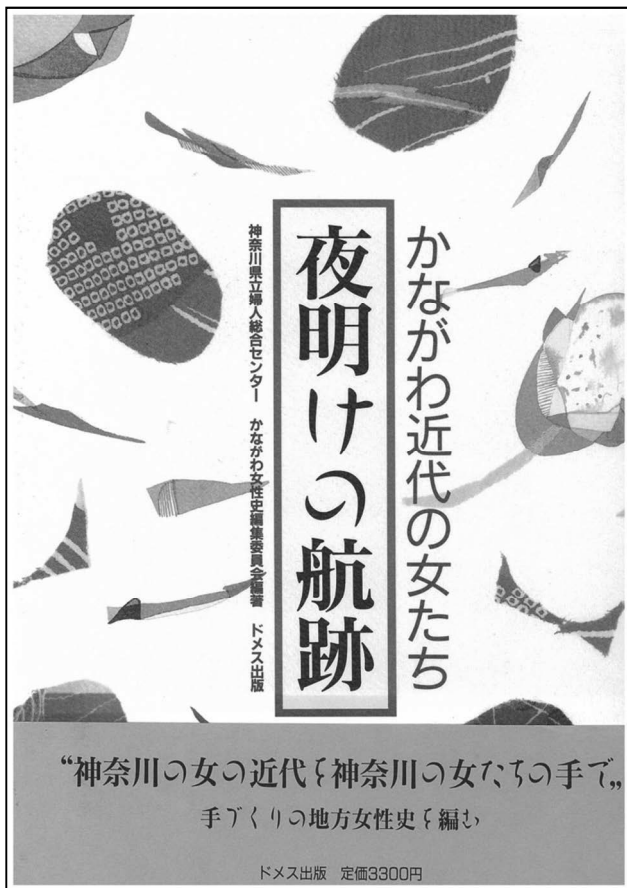


【夜明けの航跡—かながわ近代の女たち】



【内容】

I 年表でたどる女たちの“航跡”

〈1868年 - 1945年

明治期・大正期・昭和戦前期〉

“航跡”の光と影—金森トシエ

- 1 1868年 - 1912年〈明治期〉
- 2 1912年 - 1926年〈大正期〉
- 3 1926年 - 1945年〈昭和戦前期〉

II 三つの時代

—“地方”と“女性”の視点から

- 1 1868年 - 1912年〈明治期〉
—吉見周子
- 2 1912年 - 1926年〈大正期〉
—江刺昭子
- 3 1926年 - 1945年〈昭和戦前期〉
—加納実紀代

III ひたむきの年輪—八〇人に聞く女の暮らし ぬくもりの女性史を編む—長田かな子

- 1 おいたちと暮らし - 家庭・生活・民俗 -
- 2 はたらく姿 - 生業・職業・労働 -
- 3 学びの歳月 - 教育・芸能 -
- 4 大きなできごと - 大震災・戦争 -

IV 典拠文献、写真・図版一覧

(B5版・全305ページ)

「共同作品」としての地方女性史

—編集の経過

館長 金森トシエ

神奈川の女の歴史を、神奈川の女たちの手でたどり編むことができた—婦人総合センター開館当初のひとつの夢が、いまここに現実のものとなりました。

開館五周年の記念として本書を刊行できますことに、言葉に尽くせぬよろこびを覚えますとともに、ご協力下さいました多くの方々に心から厚くお礼を申し上げます。

近年、各地の自治体・婦人団体・女性史研究会などにより、地方女性史を掘りおこし記録する作業が進められております。そうしたなかで、本書の特徴は何よりもまず、神奈川県内の多くの民間女性と当センターの協力による「共同作品」である点、といえましよう。

そして刊行の目的を、次のようにかかげました。

「神奈川県は、幕末の黒船来航・横浜開港に始まる日本の近代の夜明けにあたって重要な舞台となり、以後進取と開放の気風に富む県民は、新しい文化文明の吸収と展開に先頭集団の役割を果たしながら近代の道を歩んだ。

こうした神奈川の近代史に、県民の半ばを占める女性が負い、かつ果たした役割を忘れてはならず、またその女性像は“舞台”の表裏にわたってきわめて多彩であり、活力に満ちている。そうした姿を幅広く多角的にとらえ、従来の「中央」と「男性」の視点に立つ歴史検証に対して「地方」と「女性」の視点から神奈川の女性史を編集・刊行する意味は大きいと考えられる。

第二次世界大戦後四〇年余をへて、いま、日本そして神奈川の女性世界的女性解放の潮流と共に、二一世紀にむけて新しい出発点に立っている。未来を展望して女性問題の解決をめざすためにも過去から現在にいたる女性の歩みを知ることは重要である。」

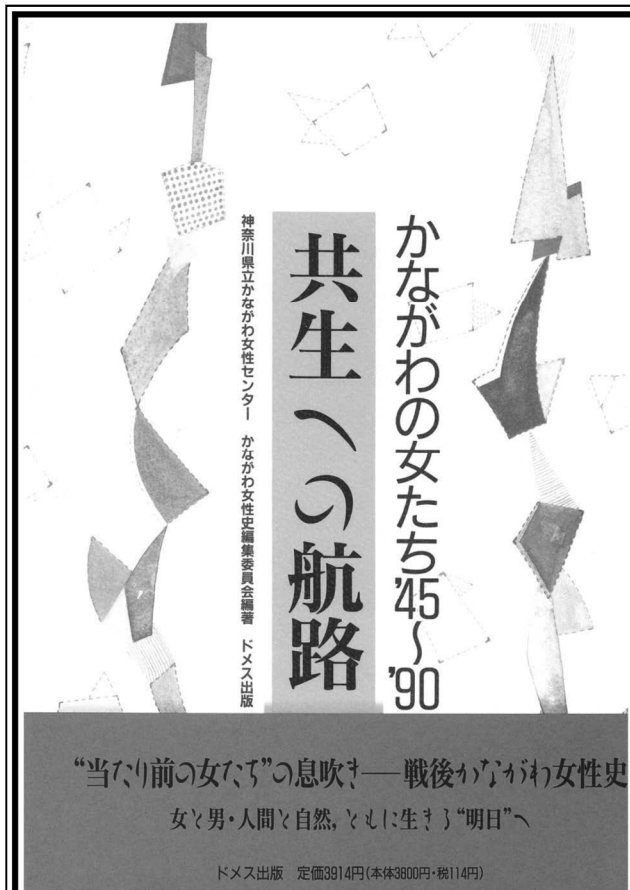
また、本書の特色として、①全体に女性解放の視点を据えながら横浜開港以来の進取開明的な女性像、農山漁村のたくましい主婦像や暮らしの風俗なども加えて“ふくらみのある”地方女性史とする、②親しみやすい内容・表現に配慮し、たとえば年表は下段の解説にくふうを加えて“読める年表”とする、③一方、専門研究者の視点に立つ論文によって各時代の女性と社会の動き、および全体の流れをとらえる—ことを、願いました。

吉見周子、江刺昭子、加納実紀代、長田かな子各氏、専門研究者は「作業部会」の三〇人のメンバーとともに、それぞれ明治・大正・昭和戦前および聞き書きの四班にわかれ、互いに緊密な連携につとめました。

専門研究者はもとより、基礎資料の収集や県内各地の聞き書きに夏の炎天下、冬の雪の中に取り組んで下さった方々、それに応じて協力して下さった多くの方々に、重ねて感謝いたします。

過去のあゆみの検証なしに現在を確かな目で認識することはできず、また現状への深い認識なしに未来を拓く道を見いだすことも、拓く勇気をもつことも、不可能でありましよう。本書が、神奈川の女性がより良い明日を拓くために、意義ある役割の一端を担えますように、心から願っております。

(一部略)



【内容】

I 年表でたどる女たちの“航路”
(1945年 - 1990年)

- “当たり前”の女たち—の息吹き—金森トシエ
- 1 1945年 - 1959年
 - 2 1960年 - 1974年
 - 3 1975年 - 1990年

II 自立と共生を求めて

第1期通史 日本の再建と女性

- ・政治に参加する
- ・男女共学事始め
- ・法改正と暮らしの民主化

第2期通史 経済成長と女性の変化

- ・豊かさを求めて
- ・性別役割分業を問う動き
- ・職場に進出する女性

第3期通史 女性たちの第二ラウンド

- ・世界的潮流の中で激変する法制度
- ・「雇用平等」の時代
- ・“女の時代”神奈川の幕開け

III 私たちの戦後—手記・聞き書き—

IV 典拠文献、写真・図版一覧

(B5版・全366ページ)

発刊によせて

館長 星野昌子

「かながわの女性史（戦後編）」が、五年の歳月と辛苦のもとに刊行されましたことに心から喜びを覚えます。

本書の前編、『夜明けの航路』が世に出て広範囲の方がたのご関心とご支持をいただきましたのは昭和六二年十一月でございます。それ以来一貫して編集に携わってこられた皆様に、ここに心からの謝意を表したいと存じます。

私どもかながわ女性センター（平成三年四月一日「婦人総合センター」から改称）も、おかげをもちまして、本年創立十周年を迎えました。社会経済状況の変化や国・市町村行政の推移、県民の皆さまのニーズなどに的確に対応し、多くの先覚が営々と築いてこられた大きな実績をさらに豊かなものにしていくことが、今日、私どもに課せられた重大な責務でございます。

敗戦がもたらした婦人参政権、国連婦人の十年、基地問題に象徴される海の向こうからの強風を、ある時は追い風に利用し、またある時は真向こうから立ち向いながら、舵を取り舳先を進めてきた女性たちの姿が込められています。そして今、「共生」の名のとおり、「男性も乗組員」との自覚に立ち、次に目指す港—多様な選択肢のなかから女性が自ら生き方を選びとれる社会に向けて、新たな航路へと舳先を解く時と感じております。このようないわば女性をとりまく状況が第二のステージを迎えて新たな飛躍が求められている時に、本書が上梓されたことは、まことに時宜に適ったものと考えます。

あつめられた資料・記事に込められた丹念さ・周到さ、そしてさまざまな道をあゆんだ身近な女性たちに寄せる愛情は、本書をひもとく方がたに必ず伝えられると信じます。そしてこれらに基づく女性問題解決に向けて、ひたむきな、潔い姿勢に、前者にも増して共感を覚えていただけるのではないのでしょうか。

ここに改めて、寄稿者・取材協力者・編集委員・ワーキンググループのメンバー、それに県民の皆さまのご尽力、ご支援に厚くお礼申し上げます。

加えて、この書が一人でも多くの方がたにお読みいただけることが、私どもへの無上の励ましとなりますことを申し添えさせていただきます。